I-7

白井晟一の造形意識における哲学的美的概念との関連について
－“普遍”の語を使用した白井の言説に関する分析 －

The relationship of philosophical aesthetic concepts in Seichi Shirai's modeling awareness
－ Analysis of Shirai's discourse using the word “universal” －

○力武瑞穂[1]，　田所辰之助[2]
*Mizuho Rikitake[1]，　Shinnosuke Tadokoro[2]

Architect Seichi Shirai (1905-1983) has been described as “lonely” and “in heretic” in previous studies, and has been cited by many reviews. On the other hand, the images of Shirai suggested by them are various, and there are situations in which different fragmentary objects coexist. In addition, it can be pointed out that the modeling created by Shirai has not developed from the recognition of “Shirai's original method”, and the logical considerations about the modeling consciousness have not been sufficiently advanced. In this study, I reinterpretation Shirai's own discourse after analyzing its relationship with philosophical concepts based on Shirai's thought background and the influence of philosophy in boyhood and adolescence.

1.　序論

1-1　研究背景及び目的

建築家・白井晟一（1905-1983）は，既往研究において“孤高”，“異端”などと評され，多くの評論により取り挙げられてきた一方で，それらが示唆する白井像は様々で，異なる断片的なものが並存している状況にある．また，白井が発する言説や創り出す造形について，“白井独自の手法”としての認識から発展せず，その造形意識についての論理的な考察は十分に進められていないことが指摘できる．本研究では，白井の思想背景に，少年期及び青年期における哲学領域から受けた影響が関係していることを仮定し，白井自身の言説や対談記事について，哲学的概念との関連を分析した上で再解釈することで，位置付けの異なる認識や断片的な把握と共に語られてきた白井像に対して，論理的考察に基づいた共通軸を提示することを目的とする．

1-2　研究方法

白井の言説の中には，数多く用いられ，思想背景や言及意図を読み取る上で重要であると推察する語句〈ロゴス・普遍・プリミティヴ・用・アニマ・アプリオリ・究竟（畢竟）・共存〉が存在する．（以下，これらの語句を総称して頻出語句と表記）白井自身の言説の中からこれらの頻出語句を用いた言説を抽出し，該当する例を本稿における詳細分析の対象とする．分析対象となる言説について，頻出語句の使われ方や全体的傾向の分析，さらに，白井の哲学領域との関連を踏まえ，哲学的概念と照らし合わせた読解を行う．以上の分析を通して，白井の言説内で各頻出語句が担っている語義や位置付けについて考究し，これに伴い表出する白井の思想概念の再解釈を行う．

2.　白井晟一の言説にみる“普遍”の用語分析

2-1　“普遍”使用箇所における傾向の考察

本稿では，頻出語句の中でも最も多数の言説内で用いられている“普遍”に関して詳細分析を行う．

初期において“普遍”という語は，漠然とした造形意識の元，それを体現するものとして使用されている．そして中期（1955 年～1974 年）になると民族や伝統，“用”の概念の確立により，創造に関する具体的な論拠が付加され，それらの概念をも包含する意味を担う語として“普遍”が用いられている．だが，初期から晩年に至るまであくまで一貫して白井の創造概念を表現する際において使用され，“創造物の在り方”を指し示す重要語句として用いられていることが読み取れる．

2-2　白井晟一の“普遍”概念と哲学的美的概念との関連

本稿では，“普遍”という語句を用い始めた初期の“普遍”使用箇所で関連がみられる（表 1, *1）哲学領域の概念について，白井の思想形成期における影響が確認できる[注1]イマヌエル・カントの著書『判断力批判』[注2]で論及されている普遍概念との横断的な考察を行う．

『判断力批判』の冒頭では，人間が行う美の判定について，主観的かつ直観的なものであると主張している一方で，対象についての認識の根拠となるものを含む以上普遍的性格を示すものであるとして，“美的（直観的）判断における普遍的妥当性”について言及されている．

ここで述べられている“主観的でありながら普遍的”という概念について，“個の中に普遍”を見出す白井の文意との一致がみられる．この哲学的美的概念との論理構造の一致からは，白井が幾度も発した“普遍”という語や主体的創造を普遍に昇華する意識が，漠然とした感覚から表れているのではなく，哲学的美的概念に基づいて確立されていることが推察できる．

1：日大理工・院（前）・建築　2：日大理工・教員・建築

【表 1　“ 普遍 ” を使用した言説に関する詳細分析】
（分析を行なった全 81 例の言説のうち “ 普遍 ” を用いた言説のみを抽出して記載）

普遍 …… 造形意識に基づいて用いられている “ 普遍 ”
普遍 …… 造形意識の表出とは異なる形で用いられている “ 普遍 ”
…… 文中の “ 普遍 ” と密接に関連している箇所
…… 創造行為に関する語句が用いられている箇所
…… 伝統の概念に関連する箇所
…… 用の概念に関連する箇所

掲載年	形式	出典（初出し）	表題	語句使用箇所	参照番号
1953	エッセイ	新建築	リチャード・ノイトラ	（リチャード・ノイトラの建築形式に対し、）“ 普遍的な性格を具えている點で、最も近代的であり且歴史に耐え得るもの ”（と称す）	【1】
1954	エッセイ	新建築	煥乎堂	（建築家の職能の在り方について言及する際に、）“ ブロンドであるか、ブルネットであるか、建築家の机にのせられた施主の夢は、人倫や經濟やそれからいよいよ普遍妥當＊1 の鋭利なメスで縦横に整理される。 ”	【2】
	エッセイ	新建築	K 邸とその書屋について	（建築における施主と作者の立場について、施主の夢の実現を肯定した上で、）“ 作者の夢も密かに自己格闘をする。普遍妥當＊1 の創造かもしれない。 ”	【3】
1956	エッセイ	新建築	繩文的なるもの – 江川氏旧 韮山館について	“ 人と時代の生活・精神を普遍妥當＊1 なリアリティにおいて統一し、これを永遠なる價値に昇華させる力量は、あるいは個性や時間を超えたものであろう。……だが、消長こそあれ、民族の文化精神をつらぬいてきた無音な繩文のポテンシャルをいかに繼承してゆけるかということのうちに、これからの日本的創造のだいじな契機がひそんでいるのではないかと思う。 ”	【4】
	エッセイ	リビング デザイン	豆腐	“ もし豆腐に美ありとするならば、……用に對して、永續性ある普遍な信頼が豫想されることによって、このような善における美同一が考えられる。 ” “ 豆腐は、ながいあいだ日本人の生活の中で榮達者にも失意者にも普遍な「用」として「常」の中で成熟し完成したものにちがいない。 ”	【5】
	エッセイ		豆腐入門	同上	【6】
1957	対談	建築文化	白井晟一 VS 神代雄一郎 「ギリシャの柱と日本の民衆を読んで – 作家・白井晟一の建築創造をめぐって」	（「西洋建築」という言葉についての議論の中で「洋服」を引き合いに出し、）“ 僕らの社会や生活に密着しているもので、これ以外に普遍な服装はないのだけど、あえて日本服といいません。 ” （日本の日常の中で「洋服」に対して「和服」という言いかたの方が特殊化していることについて）“ 特殊と普遍がすっかりところをかえて了った。 ”	【7】
	座談会	建築文化	白井晟一・丹下健三・林昌二・大高正人・徳永正三 「作家の側から見た建築家と建築の諸問題について」	“ 建築家は誰しも自分の掘下げ方には、普遍性に対する責任を伴っている筈だと思う。……時間に耐えていくものはその質がよいのであろうし、そうでないものは自然に絶えてゆく。 ”	【8】
	エッセイ	新建築	待庵の二畳	（利休の）“ 死は箴言であった。利休はこのときはじめて我執から解放され、歴史世界の普遍的根據と主體的に對決することとなる。利休の創造的ダイモニアは息吹きはじめる。 ”	【9】
1967	対談	デザイン批評	白井晟一 VS 原広司 「人間・物質・建築 – 現代のデザインについて語る」	“ 原 ― つまり、白井さんの才能を普遍するというか、そういうことはあまりお考えにならないんですか。 白井 ― 普遍化はムリだな。 ”	【10】
1978	対談	木	白井晟一 VS 神代雄一郎 「木のはなし」	（伊勢神宮のような特殊な構造建築についての考えを示す場面で、）“ あの建築造形は南方あるいは北方水辺で生活の定着を獲得した民族の住居様式であることが明らかなだけ、いわゆるユーラシア大陸文化の東ターミナルとしての普遍性をもった原型として扱うには偏在性が顕著すぎて、私にはオリジナルな感情移入さえむずかしい。 ”	【11】
	対談	白井晟一研究Ⅰ	白井晟一 VS 磯崎新 「芸術論の不在　コンフリクトの発見　コンセプトの克服　プロフェッションということ」	（日本の芸術について、）“……人間のあらゆる体験、コンフリクトもその統一もだよ、普遍的な存在に高めて定着させよう、伝承しようという、西洋流に言えばア・プリオリなポテンシャル、内面のメカニズムが日本の文化伝統には欠けている。 ” “ 入宋当時の若い道元に、そういった批判精神の原となる教養が熟しているはずもないが、主客止揚、普遍なものの自覚を経験するのは、はるか後年のことではないとかと思うな。 ” （磯崎の、今日という状況の中で根元というものが消え去ってしまっているという発言に対し、） “ 白井 ― 根元というと具体的にどいうものを考えているの。それは、原体験の昇華というようなものと考えられないかね。人間普遍の。 ”	【12】
	講義	現代建築の再構築	創造の倫理	“ 私が本当にみんなと話し合いたいのは、……伝統という概念を特殊なローカリティから解放された自由人間的、普遍なものの場で確かめてゆくこと…… ” “ 伝統が共通に普遍な理念のカテゴリー内で語られるべきことだという、いわば概論だが、実は民族もまた一人の日本人も全体の中の個にほかならない。その個をコスミックな普遍に揚棄することが可能かどうかという前提があって、そこから拡大論を展開してゆくのが順序だ。 ”	【13】
	エッセイ	高田博厚作品	高田博厚	（高田博厚に尊敬の意を示した上で、）“ 高田は早くから、他と自己を区別させようというような、普遍に逆らう思い上がった想念から毅然として自由であった。 ”	【14】
	エッセイ	the 骨 董 Ⅱ	骨董について	“ 骨董に、悪も善根もない。普遍なロゴスとも無縁である。 ” （“ どのように周到な書典も、解釈も、骨董するというプリミティブな行為に肉迫することはできない。 ”）	【15】
1979	対談	婦人之友	白 井 晟 一 VS 草 野 心 平 「『書』について」	“……一見何ら美を誘う奇はないのに、われわれが「豆腐」に美を感じるとすれば、それはなぜなのか―。栄達の人にも失意の人にも、普遍な信頼をえて、長い間、日本人の生活にとけ込み、その中で完成された「用の美」が、あの単純な形に生きているからではないか・・・。 ”	【16】
1981	エッセイ	現代書道	新筆一如	“ このところしばらく師を六朝の摩崖・石刻碑銘にしぼっているが、恰も常息のうちに人間普遍な意識と觀想が統一されているしか言いようのない、その書の漂う無極な氣配に對するたびに、この年になっても一向輕くならない書の内実となるものの基本的作業の重さを、自戒反芻させられるばかりである。 ”	【17】
	インタビュー	草月	白井晟一 VS 磯崎新 「普遍のアニマ」	“ まず、古典の時、それから空間を解放する、史観や様式論の桎梏から自由になって、古典の生きた精神を発見しようとする自律的な作業から出発した実感を把むことが大切だと思う。それがやがて古典のアニマに迫る、いわば普遍的な人間性から神性まで包含する古典の質とスケールを見極める唯一の道につながるのだということ。 ” “ 古典のアニマは、西洋人のうちにも、われわれのうちにも呼吸している普遍な実存だ、という自負がほしい。 ” “ 古典を典型やドグマの中でかたづけるのではなく、アプリオリとして、内在する普遍なアニマから、その時々刻々転変する生命のアトメン〔息吹〕を感得する。 ” “ 日本で古典とされるもので、もしユーラシア大陸の厖大な空間と長い時間に君臨した文化に匹敵し得る質と深さをもっているものがあるとしたら、……その普遍な美と真実を誤りなく看取するのに我も彼もないし、あってはならぬだろう。 ”	【18】
	エッセイ	木の家具	私の家具観	（キリストの最後の晩餐図について）“ 中世になってキリスト教の普遍安定とともに、禮堂にはしばらく聖職者のビルトインベンチが現れはじめる…… ”	【19】
1983	対談	白井晟一研究Ⅳ	白井晟一　VS 谷川俊太郎 「詩と建築」	建築家というのは合理的で快適な空間を提供する。そういう「用」に奉仕する職業以外ではないが、私にとってはそれが同時に時代や社会に対する批評精神の具体的な作業に他ならぬと考えています。……美や機能の充実なくして普遍なコンセンサスにつながるものとはならぬでしょう。 ”	【20】
	対談	ユリイカ	白井晟一 VS 栗田勇 「現代建築と聖なるもの」	“ ただ一人誰にも似ていないという様な藝術家の衿持は、小世界的な個性の域を謳歌することじゃない、いつでも自由なスケプシスとパースペクティブを失わない、いわば普遍な共同体的真実 ― 伝統とか民衆のプリミティビティに基盤があって生まれるもんだという、そういったフレキシブルな自覚があってはじめて意味をもつわけだね。 ”	【21】

＊1 …… “ 普遍妥當 ” という使われ方からは、哲学において真理や倫理的・美的価値などに備わっているとされる性質について言及する際に用いられる普遍妥当性の概念との関連が推察できる (本稿 2-2 項にて考察)

6. 注釈　[注 1] 白井晟一, 神代雄一郎「ギリシャの柱と日本の民衆を読んで – 作家・白井晟一の建築創造をめぐって」『建築文化』彰国社, 1957 / 白井晟一「日本にいた私の知らないブルーノ・タウトについて」『ＳＤ』鹿島出版会, 1978　にて白井自身がカントから受けた多大な影響について言及 . また、川添登「白井晟一論ノート 1」『近代建築』近代建築社, 2007 / 白井晟一研究所『白井晟一全集　補遺』同朋舎出版，1988 の白井の経歴からも哲学領域からの影響が記載されている　[注 2] von Immanuel Kant『Critik der Urtheilskraft』Bey Lagarde und Friederich，1790

7. 参考文献　［1］「白井晟一研究企画」編集室『白井晟一研究Ⅰ』南洋堂出版, 1978　［2］「白井晟一研究企画」編集室『白井晟一研究Ⅱ』南洋堂出版, 1979　［3］「白井晟一研究企画」編集室『白井晟一研究Ⅲ』南洋堂出版, 1981　［4］「白井晟一研究企画」編集室『白井晟一研究Ⅳ』南洋堂出版, 1982　［5］「白井晟一研究企画」編集室『白井晟一研究Ⅲ』南洋堂出版, 1984　［6］「白井晟一研究企画」編集室『白井晟一研究Ⅲ』南洋堂出版，1981　［7］白井晟一研究所『白井晟一全集　別巻Ⅰ　白井晟一の眼Ⅰ』同朋舎出版，1988　［8］白井晟一研究所『白井晟一全集　別巻Ⅱ　白井晟一の眼Ⅱ』同朋舎出版，1988　［9］白井晟一他『白井晟一建築を語る』中央公論新社，2011　［10］白井晟一研究所『白井晟一全集　別巻Ⅰ　白井晟一の眼』同朋舎出版，1988　［11］岡崎乾二郎『抽象の力』亜紀書房, 2018　［12］鈴木哲『カント「純粋理性批判」入門』講談社, 2000　［13］カント著, 篠田英雄 訳『判断力批判 上 』岩波書店, 1964　［14］カント著，篠田英雄 訳『判断力批判 下 』岩波書店，1964　［15］坂部恵『カント哲学のアクチュアリー　哲学の原点を求めて』ナカニシヤ出版，2008　［16］中山元『自由の哲学者カント　カント哲学入門「連続講義」』光文社，2013　［17］佐藤廉邦『カント「判断力批判」と現代』岩波書店，2005　［18］有福孝岳，牧野英二『カントを学ぶ人のために』世界思想社，2012　［19］川添登「原爆時代に抗するもの」『新建築』新建築社, 1955　［20］川添登「祈りの造形」『朝日新聞』朝日新聞出版, 1959　［21］川添登「白井晟一の世界」『建築文化』彰国社，1968　［22］川添登「白井晟一論ノート　1」『近代建築』近代建築社, 2007　［23］川添登「白井晟一論ノート　2」『近代建築』近代建築社, 2007　［24］磯崎新「破砕した断片をつなぐ眼」『ＳＤ』鹿島出版会，1976　［25］白井晟一『無窓』筑摩書房 , 1979　［26］長谷川堯「呼びたてる＜父＞の城砦」『建築』中外出版株式会社，1972　［27］浅野敞一郎「白井晟一氏についての断片的ノート」『ＳＤ』鹿島出版会，1976　［28］柿沼守利，堀部安嗣「普遍的な美を求めて」『住宅建築』建築資料研究社，2019［29］岡崎乾二郎他『白井晟一の原爆堂　四つの対話』晶文社，2018